



遅ればせながら、明けましておめでとございます。この間、今年のおとにちなんで「羊のように穏やかな年になってほしい」と話す人の記事が見られました。昨年も事件や事故、大災害が相次ぎました。本当にそう願わずにはいられません。

えとに関係なく、毎年のようにそんな気持ちになるものでしょう。ですが、20年前の1995年は早々に打ち砕かれました。1月17日早朝、阪神大震災が発生しました。翌18日付の毎日新聞岡山面では、「交通機関に混乱」の見出しとともに、県内の被害や影響を伝えています。震度4を記録し、余震が続いたこと。岡山市役所の窓ガラスがひび割れるなど、多くの建物でガラスや外壁が落ちたこと。新幹線の運休や高速道路の通

行止め、岡山空港に空路の予約が殺到したこと。AMD Aや県警、消防から救援要員が派遣されたこと。その後も連日、関連の報道が続きました。



兵庫県・淡路島の北淡町（現淡路市）で倒壊した民家（1995年1月17日）

阪神大震災20年

スクに連絡を取ると、すぐに車ごとフェリーで兵庫県・淡路島に向かうよう指示されました。

さっきまでテレビで見ていたような、大規模な火災や大きなビルの倒壊こそありませんが、いくつもの家が崩れ落ちていました。まだ救助活動が続くのか、誰に何を聞けばよいのか、すぐには思いつきません。避難所で肩寄せ合う住民の皆さんにも、どう声をかけていいのか分かりませんでした。大変なことは一目瞭然です。例えば「頑張ってください」とか「体調に気をつけてください」などの言葉も、置かれた状況からは空虚で無意味に思えました。

いたりしました。その優しさに応えるような仕事もできなかった悔いが、今も残ります。

それから3年後の阪神の被災地取材した際には、生活の立て直しがままならず、仮設住宅での暮らしも「限度」という声を聞かされました。公的支援の必要性を訴える動きもありましたが、何も「家を建ててくれ」などと求めているわけではありません。「国は見捨てていない」ことの証しとして、ささやかでも手を差し伸べてほしいと願っていました。

20年を経て、阪神の被災地の街並みやインフラは復興しましたが、しかし、そこで暮らすなかには、今年も、これからも、悲しみや亡き人への思いを胸に「1月17日」

私は当時、和歌山支局員でした。自宅マンションで激しい揺れに跳び起き、しばらくしてつけたテレビが映し出す惨状に声も出ませんでした。ポケットベルが鳴り、支局デ

員がいて、栄養ドリンクをいただ

を迎える人がいます。教訓と人々の無念を伝える報道が、岡山でも防災を進める一助になれば、と思います。